７　次の文を読んで、後の問に答えよ。 　　　　　　　　　〈京都大〉二〇二三年度出題

　冬もやうやうふかくなりけるに、暮れ行く空のけしきすさまじく、雪もちらちらちりしが、とかくする程に、日もすでに暮れはてて、の闇さへいとどうとまし。かくて夜もふけ行くままに、夜さむ身にしみわたり、しばしもいねやらで、丑みつばかりになりぬるに、鐘のこゑもきこえず、鶏のもせで、なにとなくしづかになるやうに覚えしが、いつあくるともなく、窓のしらみあひける程に、家にありしわらはよびおこして、の戸あけさすれば、夜のまに雪いとおもしろうふりつみて、庭の草木も花さき、にはかに春来るここちし、の山の端もみな白妙になりて、人間世界、さながら上の白玉京かとあやまたるる折しも、あたりちかき池の水鳥のこゑごゑになくも、程なければきこゆ。さこそ波のうきねのさむからめと、それさへ哀れを添へて、（１）さても心あらん友もがなと、人ゆかしう思ひし折ふし、いつも問ひかはす人のもとよりとて、文もて来ぬ。いそぎ開きて見れば、「めづらしき雪にて侍る。いかが見給ふやらん。さてはこの雪に、御起きふしも覚束なく思ひ侍る」となんかきけるにつけて、かの兼好が、雪のいとおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべき事ありて文やるとて、雪の事なにともいはざりしに、この雪いかが見ると一筆いはぬとて、口惜しき事といひこせし事をふと思ひ出でて、（２）是はあなたよりかく気をつけていひこせしを、こなたより返事なくば、うらみやせんと思ひしままに、使ひしばしまたせて返事かきて奥に、

　　空にふる雪はこずゑの花なれやちるかさくかとあやまたれける

とかきて、「さてけふはひとへにさびしくくらし侍る。思ふどちいひあはせてこられよかし。それこそ誠の志と思ふべけれ」といひやりけり。かくてやや日たくる程になりて、門をたたく音しけり。人してあけさすれば、かの文こせし人、例の人々伴なひて来にけり。形のごとくけして、翁うれしく、さむさ忘れてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒めて出だしけるに、衆客もみな酔をすすめて、清談いとこころよく見えし。翁、

　　（３）あるじする心ばかりはゆるぎのいそぎありくにおとらめや君

　「れら事、たち侍らねば、御為にもとめてありくことはかなひ侍らねども、心ばかりはそれにもおとり申し候ふまじ」と、れごとなどいひて程を経けるに、衆客、「けふの雪には、翁のから歌なくてやはあるべき」とて、翁にを授けしに、翁、「いやとよ、むかしは雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよりも候ひしが、今は老いほれて其の心もさぶらはず。詩も久しくすてて作らねば、口渋りていひ出づべき事も覚えず。されどけふの御たづね忘れがたく侍るまま、（４）いかさまにも申してこそみめ」とて、しばし打案じて、

　　 下、 万 。

レ 平 樹、レ 遠 舟。

（５）吾 ㆓ 安 ㆒、客 来 皆 子 猷。

　　草 堂 ＊ 、 ㆓ 故 ㆒ 。（室鳩巣『駿台雑話』より）

注（＊）

天上の白玉京＝天上世界の白玉の楼閣。

こゆるぎの＝相模国にあるの磯に由来する枕詞で「いそ（ぎ）」にかかる。

われら＝ここでは複数ではなく、自分一人のことをいう。

足たち侍らねば＝老齢で足腰が弱っていることをいう。

簡を授けし＝ここでは漢詩を依頼したことをいう。

駿台＝江戸の駿河台。

闃寂＝静まりかえってさびしいさま。

問１　傍線部（１）（３）を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問２　傍線部（２）はどのような意味か、直前の兼好『徒然草』の挿話にも触れながら説明せよ。

問３　傍線部（４）はどのような意味か、この考えに至る経緯を含めて説明せよ。

◎問４　傍線部（５）の安道は、子猷は、ともに中国東晋の人である。雪の夜に出た月をともに愛でるため、子猷ははるばる安道を訪ねたという故事がある。これを踏まえ、傍線部の意味を説明せよ。

【解答と採点基準】

問１（１）＝Ａ美しい雪景色にＢ水鳥が鳴く声を聞くにつけても、ここにＣ情趣を解する友人がいればなあ、とＤ人恋しく思ったその時、

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「心」は「風流」など、「もがな」は「ほしいなあ」などもそれぞれ可。〕

Ｄ＝３〔「ゆかし」を「人恋しく」や「人に会いたい」などと訳していなければ不可。〕

（３）＝私はもうＡ老いて足腰が弱って動き回れないが、Ｂ来客をもてなす気持ちだけはＣ酒の肴の準備のために歩き回るのにＤ劣るだろうか、いや劣っていないよ、みなさん。

［別解］Ａ歩くことさえままならない私ですが、Ｂ客人を歓待する心のほどは、Ｃ小余綾の磯を急いで回るときの気持ちにＤ劣ってはいないはずだがねえ、みなさん。

Ｂ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝４

Ｄ＝２〔反語の訳出が必須。〕

問２　Ａ兼好が雪の朝に手紙を送る際に、雪について触れなかったことを相手から責められたという『徒然草』のくだりをＢ自分と同様に友人も想起して、この雪の朝に手紙を寄こしたので、Ｃ雪に言及した返事をしなければＤ風流を解さない者だと不満に思われるのではないかと危惧したということ。

Ａの内容（『徒然草』の挿話）がなければ全体０。

Ａ＝３／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝３

問３　来客から漢詩を求められ、Ａ四季折々のすばらしさに出会うとすぐに作れた昔と違い、Ｂ年老いた今では創作意欲も衰え、うまく作れないが、Ｃ雪の中の友の来訪に感激し、Ｄなんとかして漢詩を作ってみようということ。

Ｂ・Ｃの内容（漢詩を作るに至る経緯）がなければ全体０。

Ａ＝２〔「四季折々のすばらしさ」は「風流」などでも可。〕

Ｂ＝３〔「年を取って詩作の自信がない」などでも可。〕

Ｃ＝２〔「皆の来訪が嬉しく忘れ難い」などでも可。〕

Ｄ＝３〔「いかさまにも」を「なんとかして」や「ぜひ」などと訳していなければ不可。〕

問４　Ａはるばるやってきた王子猷とともに雪景色を愛でた戴安道に年老いた自分を重ねるのは恥ずかしいが、Ｂ今日集った客人たちはまさに王子猷のように情趣を解する方々だということ。

Ａ＝５〔同内容可。「戴安道と比較して、自分が劣っていて恥ずかしい」ということが記されていなければ不可。〕

Ｂ＝５〔同内容可。「訪ねてきた客人が、王子猷に匹敵する風流人である」ということが記されていなければ不可。〕

【現代語訳】

　冬もしだいに深くなった頃に、暮れ行く空の様子が寒々として、雪もちらちらと降っていたが、あれこれするうちに、日ももうすっかり暮れて、闇までもがますます気味悪い。こうして夜も更けていくにつれて、夜寒が身に染み渡り、少しも寝ることができず、丑三つ時（＝午前二時過ぎ）ほどになったので、鐘の音も聞こえず、鶏の声もせず、なんとなく静かになるように思われたが、いつ（夜が）明けるともなく、窓（のあたり）が白んでいった時に、家にいた童を呼び起こして、寝所の戸を開けさせると、夜の間に雪がたいそうすばらしく降り積もって、庭の草木も花が咲いて（いるかのようで）、急に春が来る心地がし、四方の山の端もすべて真っ白になって、人間世界が、まるで天上世界の白玉の楼閣かと自然と見誤られるちょうどその時、近くの池の水鳥がそれぞれの声で鳴くのも、（ここから）距離がないので聞こえる。さぞかし波に浮かんで眠るのは寒いだろうと、そんなことまでもの悲しさを加えて、問１（１）それにつけても情趣を解する友人がいればなあと、人恋しく思ったその時、いつも手紙のやりとりをする人のもとからと言って、（使いの者が）手紙を持って来た。急いで開けて見ると、（手紙には）「めったにないすばらしい雪です。（あなたは）どのようにご覧になっているだろうか。さらにはこの雪（のせい）で、（あなたの）起き伏しも気がかりだと思っています」と書いていたの（を見る）につけても、あの兼好法師が、雪がたいそう趣深く降り積もった朝に、ある人のもとへ言わなければならないことがあって手紙を送るということで、雪のことに何も言及しなかったところ、（その手紙の返事に）この雪をどのように見るかと（兼好が）一言も尋ねないといって、（それは）残念なことだと言ってきたことをふと思い出して、これはあちらからこのように気を遣って（雪のすばらしさについてどう思うか）言って寄こしたのに、こちらから（雪のすばらしさについての）返事がなければ、不満に思うだろうかと思ったので、使いの者をしばらく待たせて返事を書いてその最後の部分に、

　空に降る雪はに咲く花であるのか。（いや、そうではないのにまるで花が）散るのか咲くのかと自然と見誤られることであるよ。

と書いて、「それにしても今日はまったくさびしく過ごしています。気の合う仲間同士で誘い合わせてお越しくださいよ。それこそ本当の数寄者と思ってよいだろう」と言い送った。こうしてしだいに日が高くなる頃になって、門をたたく音がした。使用人に開けさせると、例の手紙を寄こした人が、いつもの人々を伴ってやってきた。形式どおりのもてなしをして、翁（＝私）はうれしく、寒さも忘れてにじり出て、互いに語り合ったが、酒を温めて出したところ、客人たちも皆酔いを進めて、高尚な話が大変楽しそうに見えた。翁は、

問１（３）来客をもてなす気持ちだけは準備のために歩き回るのに劣るだろうか、いや劣っていないよ、みなさん。

　「私は、（老齢で）足腰が弱っていますので、みなさんのために酒の肴を求めて歩き回ることはかないませんが、気持ちだけはそれに劣り申し上げないでしょう」と、冗談などを言って時間が経過した頃に、客人たちが、「今日の雪には、翁の漢詩がなくてよいだろうか、いやよくない」と言って、翁に漢詩を依頼したので、翁は、「いやいや、昔は四季折々のすばらしさに出会うと、すぐに漢詩の発想もありましたが、今は老いぼれてその心もありません。漢詩も長く捨てて作っていないので、口がつかえて言い出すのにふさわしい言葉も思いつかない。しかし今日の（みなさんの）ご訪問を忘れることができませんので、なんとかして作り申し上げてみよう」と言って、しばらく思案して、

家は駿河台のもとにあり、門は万里の流れに面している。

平野の木々は雲に隠れ、雪の中棹をさして進む遠江の舟。

私は老いて（自身を）戴安道に喩えるには恥ずかしいが、客人たちは皆まるで王子猷だ。

草堂はひたすら静まりかえってさびしく、喜んで旧友とともに（漢詩を作り）楽しむ。

【書き下し文】

はすの、はむのれ。

にるの、にすの。

いてにづ、。

へに、びてとにぶ。